

開府 名古屋の都市づくり

— 家康の考えたこと —



小治田之真清水

池田 誠一

【11】都市の完成…泰平の世の町へ

1 初期の町づくり

都市の中心は市民です。全く新しく出来た名古屋城の城下では、その市民は大半が清須からの移住者になりました。いわゆる「清須越」です。始めは名古屋越といわれましたが、次第に清須越と呼ばれるようになりました。同様に、少し遅れましたが、義直に付いて駿河から移住した人達は駿河越でした。引越しのスタートは1610年。急ピッチで移住が進み、1613年には、町が出来上がったと考えられます。

もちろん、城下は全くの新都市でしたから、いろいろな問題もあったでしょう。加えて、戦国から泰平の世へと大きく動き出したところです。都市も、新しいニーズへの対応を迫られることになりました。今回は、このような名古屋の初期の町づくりについて、みてみたいと思います。

2 引越し、そして…

(1) 清須越

城の移転は、必然的に城下の移転につながります。まず武士が動き、次に商人、職人が従います。そして、神社・仏閣もまた動くことになるのです。城ばかりではなく、古代の

都でも同じでした。木造家屋だったことも幸いしました。清須越が歴史に残るのは、人口が5万人を超すという当時としては大きな都市だったことでしょうか。

移動の時期は、本格的には城の石垣が出来た1610年の秋からになります。翌年1月の火災では新築が150戸焼けたという記録があります。町の移転では竹屋町など早くも1609年という記録があり、寺院も政秀寺など1610年に移転したものが相当数に上ります。そして当初は清須と名古屋の掛け持ちだった武士層も、1613年には名古屋に落ち着いたとされます。したがって、この頃には城下町が出来上がったと考えられます。ここに、名古屋という都市は、一応の完成を見たことになります。

一方、移転後の清須は、白引歌に、
思いがけない名古屋ができて
花の清須は 野になろう

と歌われ、一時廃墟になってしまったようです。そしてその後は、美濃路の宿場町として残ることになりました。

(2) 娯楽の場・広小路

さて、出来上がった城下の町は時代とともに少しずつ規模が拡大していきました。堀川の西、山口の北や東、小林の南など、多くは街道筋に沿って、町続きなどと呼ばれた市街が広がりました(図1)。しかし町の構造は基本的に変わることなく明治を迎えることになっ

たのです。

ところが、城下町の中で一つだけ目立って変わったところがありました。広小路です。

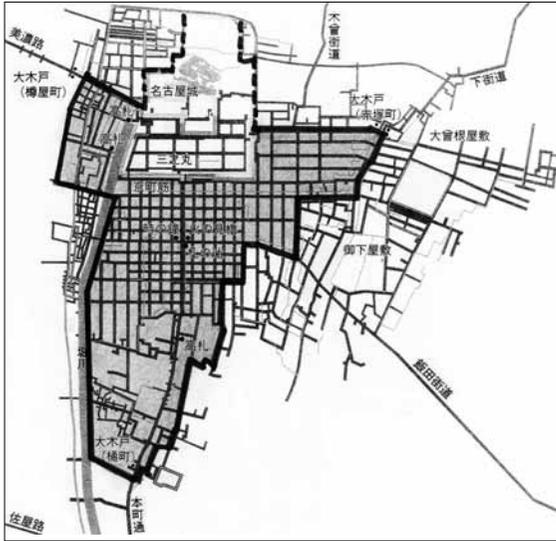


図1 初期の木戸で囲まれた区域から拡大した市街 (小池「城と城下町3名古屋」から)

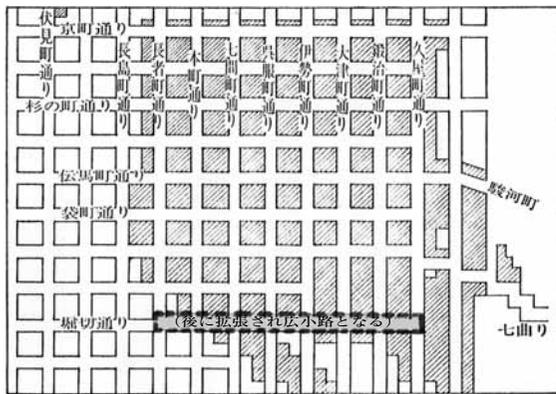


図2 万治の大火による焼失区域(中心部)と広小路

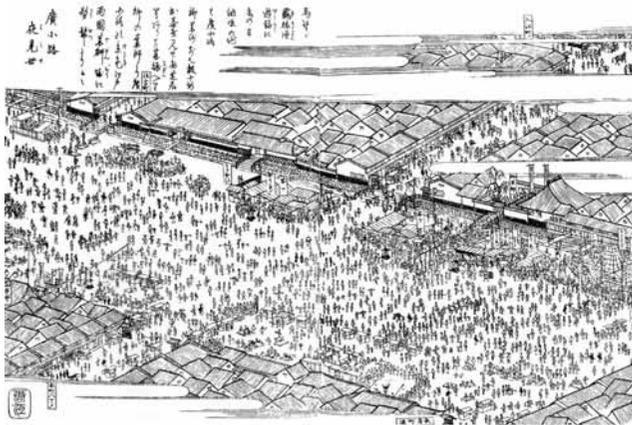


図3 広小路の賑わい。本町通との交差付近(尾張名所図会)

1660年、万治の大火で碁盤割地区の7割ほどが焼けてしまった後、焼け跡の碁盤割の南端に火除地とされる広い空間が作られた事です

(図2)。位置は、西は長者町から東は久屋町までの7町。幅は15間とされました。火事の後でもあり火除地として作られたとされますが、位置的に見ると碁盤割地区の風下で、果たして意味があったかどうか疑問が残ります。幅も実際は15間はなく、南側の大ドブと呼ばれた排水溝を加えても、13間くらいだったようです。

この広小路の成立に関して考えられるのは江戸の広小路の事です。その3年前、江戸では明暦の大火で大被害を受け、その頃は復旧の最中でした。その対策の中で、火除地として広小路(上野、両国等)づくりが行われていたのです。藩主の2代光友は江戸にあって復旧を指導したとされており、これらの対策が伝わったのではないのでしょうか。位置がよくないのは、その意味が伝わらなかったのか、適当な、あるいは可能な場所がなかったのでしょうか。

ただし、空間が出来ても始めのうちは寂しい所だったといいます。しかし周囲に施設が出来、空間内でも仮設の興行が行われるようになると、庶民の娯楽への欲求が一気に噴出しました。そして瞬く間に城下の賑やかな場所に変っていきました(図3)。広小路を道路とみると間違いで、これは広場だったのです。道路になったのは明治20年。名古屋駅まで延長され、「広小路通」となった時になります。

(3)寺町大須と七代宗春

泰平の世になって、庶民の娯楽への欲求はどんどん大きくなっていきました。その欲求を満たす場所になったのが南寺町です。この寺町は各寺に広い境内が与えられており、その余剰の空間が興行の場所として利用されるようになったのです。

開府から百年余経った七代藩主宗春の時代はその最高潮でした。橘町に続いて若宮八幡、大須観音、七つ寺など寺町内にいくつもの芝

居小屋ができ、様々な興行が催されました。さらには近くには三つの遊廓もできたのです。寺町が人の集まるのに都合がよかったのは、参拝という大義があったからでしょう。そして南寺町の中心になっていったのは家康が誘致した大須観音で、その一帯は「大須」と呼ばれるようになりました。

3 紀行 広小路と大須

… 娯楽を担った二つの繁華街 …

江戸時代、名古屋城下の繁華街といえば、広小路と大須でした。今回は、城下散策の締めくくりとして、この二つの拠点を少し歩いてみたいと思います。

〈広小路を〉

地下鉄伏見駅の8番出口を出て、ひとまず西に進みます。1本目の道が御園通で、ここが基盤割の西端です。その先は緩やかに台地を下っており、堀川の納屋橋になります。

さて、そこで向きを変えてバックします。この辺りは、当時は広小路ではなく、堀切筋という南側に大ドブのある3、4間の細い通りでした。広い国道を渡り、3本目が長者町



御園町付近から西を見る。道がやや下りつつある



広小路の西端



広小路と本町通の交点。正面は牢屋だった



朝日神社。常夜灯と左奥の蕃塀は江戸時代から通になります。万治の大火ではこの付近まで焼けたため、この通りが広小路の西端になりました。次の角は本町通です。この西南の角に柳薬師が誘致され、広小路発展のきっかけになったといえます。その後、この交差点は名古屋城下の中心になったのです(もっとも東南角のすぐ東は牢屋でしたが)

東に1本行くと北側にうっそうとした木々の中に朝日神社が見えます。清須から移った神社の1つです。この神社の入口に、常夜灯と目隠しの蕃塀があります。これらは江戸時代からのもので、広小路沿いでは唯一残った江戸の遺産といえるでしょう。その東はすぐ



栄の交差点。江戸時代は地味な所だった



広小路の東端。戦後はここが名古屋の中心になった栄の交差点、そして久屋大通です。江戸時代は南北とも武家屋敷の静かな所でしたが、前者は明治の末に、後者は戦後に、名古屋の中心地へと変りました。そして広小路の東端はその東側、中日ビルの前でした。

〈大須観音へ〉

栄駅から地下鉄名城線に乗り、上前津駅で下車します。北側の12番出口を出て左、左と曲って西に進み、交差点を渡ると万松寺通です。戦後の沈滞期から見事に立ち直ったアーケード街をまっすぐ進むと門前町(本町通)に出ます。江戸時代はこの通りが寺町の中心で



仁王門通の入口。
今はおとなりの万松寺通の方が活気がある



大須観音。右下の立札に大須文庫の説明がある

した。大須観音の主な参道も少し南の仁王門通だったのです。

通りを西に抜けると、右前方に大須観音が現れます。今は仁王門も本堂も南を向いていますが、昔は東向きでした。芝居小屋の建った広い境内はなくなり、戦災もあって面影は残りませんが、当時はここが名古屋の芸処の一角を支えていました。門を入ると右奥に通用門のような入口があります。最古の古事記の写本など国宝4点を蔵する大須文庫はその奥です。コンクリートの書庫に変えてあったため戦災を免れることが出来ました。西門を出て右に地下鉄の出入口があります。

4 家康の「文化」

広小路、大須の繁栄で分ることは、当初の街づくりで欠落していたのは文化面のようなのです。家康はどう考えていたのでしょうか。戦国の世の直後、庶民の文化までは無理でしたが、彼流の文教の拠点構想があったのです。

家康は大変な愛書家だったことが知られます。小田原戦後に関東を与えられると、荒れた金沢文庫を江戸に移して修復し、紅葉山文庫としました。京の伏見に住むと伏見学校を作り、古典の復刻をしました。また駿河に隠居するとそこでも駿河文庫を作り、これが死後、御三家への駿河御譲本になりました。

関ヶ原戦後、目を付けたのが岐阜県の大須にあった真福寺宝生院の経蔵学問庫です。醍醐寺、根来寺と並ぶ「三経蔵」とも、また仁和寺、根来寺とともに「本朝三文庫」ともいわれていました。しかし木曾・長良の大河に囲まれ、1605年の大洪水では堂塔が流されたうえ経蔵も浸水していました。この寺を、家康は家老を通して名古屋に移転するよう働きかけたのです。そして1612年南寺町の一角に北野山真福寺、いわゆる大須観音ができ、同時に蔵書1万5千巻という大須文庫が誕生することになりました。少し硬い文化ですが、城下の文教の拠点として、以後、藩の手厚い保護を受けることになったのです。

〈主な参考文献〉

- ①城戸久『名古屋城史』(1959、名古屋市役所)
- ②大野一英『広小路物語』(1976、六法出版社)
- ③宝生院編『大須観音真福寺略史』(1954、浜島書房)
- ④芥子川律治『家康がつくった革新名古屋』(1977、地産出版)